第６章　関連文化財群に関する事項

（１）関連文化財群の定義

地域や歴史的なつながり等共通のテーマで文化財とその周辺環境を含め、それらを一体として価値づけできる文化財等のまとまりを関連文化財群という。

（２）関連文化財群設定の意義

文化財群として取り扱うことによって、未指定文化財についても構成要素としての価値づけが可能となるほか、相互に関連した文化財の多面的な価値を見出すことができる。これにより、単体の文化財だけではなく、文化財の周辺環境やそれに関わる人の活動をも評価でき、所有者や地域住民が文化財の保存と活用に関わっていくことのきっかけとなることを期待するとともに、観光客等にも新たな魅力を提示することで、地域振興の一助となることを目指す。

（３）関連文化財群設定の考え方

津山市域は、和銅６（713）年の美作国設置以降、常に美作国の政治・経済・文化の中心としての役割を果たしてきた。また、美作国は西日本では数少ない内陸であったことから、特徴のある歴史文化を形成してきた。そのため、現在の岡山県内においても、美作地域は独特の存在感を有している。

そこで、関連文化財群共通のテーマを「日本最西端の内陸国」として、さらに第３章で５つに整理を行った歴史文化をサブタイトルとして位置付け、有形・無形、指定の如何を問わず地域に残る歴史文化をその特徴や歴史的、地域的な関連に基づいた一定のまとまりとして、次の関連文化財群を設定した。

津山市外の構成文化財についても、ストーリーを語るうえで欠かすことのできないものであるとの認識から記載している。これらの文化財の保存活用については津山市が直接取り組むことができるものではないが、何らかの形で関係自治体などと連携を行う必要がある。

（４）関連文化財群の保存活用に関する方針

関連文化財群のそれぞれのストーリーには、地域の豊かな歴史文化を体現している。これらの中には、観光分野で活用できるもの、新たな地域産業の創出につながるものも多くある。関連文化財群の魅力や特に来訪者（海外を含む）の視点に立った価値を見極めたうえで、観光産業や地域ブランドの創出等関連文化財群を活かすための事業戦略を立てることする。また、関連文化財群を活かした事業を進めるには民間のプレーヤーの存在が欠かせないことから、これら

の人材育成のための事業を行う。最後に関連文化財群をよりわかりやすくするための個々の構成文化財の修繕やガイダンス施設の整備などハード面での事業を実施する。

（5）関連文化財群一覧

歴史文化の特徴	タイトル	ストーリーの概要
1 自然とともに生きる	日本三大局地風 広戸風	このように、年間を通じて特に主な生業である農業に関する祭りが、地域で行われてきた。これらの祭りの一部は今に伝わり、自然に寄り添いながら生きてきた人々の営みを垣間見ることができる。
	城とまちを支えた 津山石	津山盆地の南に位置する神南備山付近に分布する凝灰岩石材である「津山石」は、津山城の石垣だけでなく城下町でも利用され、城とまちを支えた。
	☆ 中国山地の製鉄所 鉄の遺構群	鉄は人々の生活に欠かすことのできないものであることは言うまでもない。市街地北部の旧加茂町ではその鉄とかかわりのある地形が各所に残っている。古代から近世にかけて砂鉄が採集された跡である。この地域の人々の生活は製鉄と切り離すことのできない環境の上に成り立っている。
	地域のよりどころ むらのまつり	春は田植えの季節であり、農作業の始まりである。御田植祭が行われ五穀豊穣を祈願する。夏には、各地域で虫送りや風除けの行事が行われているところがある。秋には豊作を感謝して祭りが行われ、農閑期である冬にも盗難除けやマムシ除けの祭りが行われている。
2 悠久の歴史と文化のふるさと	☆ 法然ゆかりの立石家	法然上人の出自である漆間氏の本家である立石家は古代に九州の宇佐から美作へ移り住み、代々美作国二宮である高野神社の宮司として二宮の地に住み続けている。戦国時代には居住地背後の美和山１号墳を改変して美和山城を築き、詰めの城とした。江戸時代には宮司・大庄屋として地域に貢献し、近代には実業家として自宅敷地内に鉄道を敷設する等、津山地区の近代化に大きく貢献した。
	ここが違う中山造 （神社建築の世界）	美作国一宮の中山神社は、尼子晴久により建設された「中山造」と呼ばれる独特の建築様式を持っている。「方三間、入母屋造、妻入、唐破風の向拝」という外観で特徴付けられ、美作を中心に分布している。中山神社以外は江戸時代前半に主として藩主森長継により建設されており、津山市周辺の神社建築の特徴となっている。
3 歴史と文化の交差点	航路ネットワーク 吉井川と高瀬舟	美作の地は、豊富な森林資源の供給地として知られていた。その森林資源を活用して、古代以来の製鉄に加え、紙すきが行われ、また木材加工を仕事とする木地師が活動していた。それらの生産品は、河川を利用した高瀬舟や陸路である街道（姫路から松江にいたる、出雲街道等）を通じて、畿内をはじめとした全国各地へと送られた。また、これらの物流に伴い江戸や上方の文化がもたらされ、河川や街道は、津山の物と文化を支える重要な交通路であった。今回は吉井川と高瀬舟について記述する。
	☆ おいしい 津山の食文化	津山地域は江戸時代からの「養生食い」の習慣があり、古くからの肉文化を今に伝えている。また、城下町においては、森・松平を通じて茶の湯文化に伴う和菓子の伝統が伝わっている。これら江戸時代以来の食文化は現在の津山市の風土を形成する重要な要素となっている。
4 江戸の面影を残す津山城下町	◎ 城下町を守る社寺	津山城下町は、東・北・西側を社寺で取り囲むような配置の城下町としている。城下町の中には城下惣鎮守である徳守神社・藩主森家ゆかりの寺である妙願寺があるのみで、それ以外の社寺は東・西・北の城下町縁辺分に配置している。特に西寺町は出雲往来沿いに広大な敷地を有しており、いざというときの兵溜まりの役割を果たすような構造となっている。
	◎ 城下町の活気が よみがえるまつり	祭りは神事であるとともに、氏子たちが総出で行う神輿神幸やだんじりの巡行等があり、神輿をかつぐもの、だんじりに乗るもの、まつりの警備をするもの、神輿等を修理するもの等、地域の多くの人達が関わってきた。さらに祭りは、イベントとしての側面を持っており、地域の人だけでなく多くの観光客が津山を訪れている。
5 今に伝わる津山の近代化	☆ 山陰と山陽をむすぶ 鉄路の夢 ～津山の鉄道文化財が語る人と歴史のドラマ～	津山を経由する山陰山陽連絡鉄道計画は明治 22（1889）年に始まり、明治 25（1892）年に公布された「鉄道敷設法」に条文化された。津山に陸蒸気がやってきたのは明治 31（1898）年で、陰陽連絡鉄道の結節点になったのは昭和７（1932）年、東西南北鉄道交通の要衝となったのは昭和 11（1936）年であった。その後も新駅開業に向けた運動が起こる等、美作には鉄道に賭けた人々の夢とドラマが溢れている。鉄道記念物・旧津山扇形機関車庫と転車台をはじめとする津山圏内の鉄道建造物等は、継承すべき近代化の証人であり文化遺産である。
	日本の近代化を支えた津山の洋学	江戸時代、幕府はいわゆる「鎖国」政策によって海外との交流を厳しく制限し、西洋諸国では唯一オランダだけに貿易を許した。そのため、西洋の学問はオランダを通じて日本へもたらされ、「オランダ（和蘭・阿蘭陀）の学問」、「蘭学」と呼ばれた。やがて幕末にいたり、開国して様々な国の言葉や文化が伝わると、それらを包括して「西洋の学問」、「洋学」と呼ばれるようになっていく。津山藩からは、こうした蘭学・洋学を学び、日本の近代化に貢献した、優れた洋学者が数多く生まれている。西洋内科医学から植物学、化学をはじめて日本に紹介した宇田川家三代や、ペリー来航時にアメリカの国書を翻訳した箕作阮甫らである。江戸詰の藩医であった彼らは、江戸を舞台に活躍したが、国元津山にも足跡を残している。また、彼らの活躍に影響を受けて洋学を学び、地域の医療や教育に尽した人物もおり、各地にゆかりの史跡や資料が残されている。「津山の洋学」は、江戸後期から明治初期にかけての津山を語るうえで、欠かすことのできない歴史である。

☆は本事業計画期間内において、具体的な措置を予定している関連文化財群を表す。
◎は本事業計画期間内においては、文化財保存活用区域での措置を予定している。

（６）関連文化財群

関連文化財群1　日本三大局地風　広戸風

概要

広戸風は、那岐山のふもとにあたる、津山市東部（主に勝北地区）、奈義町、勝央町のごく一部（数キロの範囲）で吹く局地風である。当地域では日本三大局地風の一つと呼ばれており、日本海から鳥取県の千代川に沿って風が吹き込み、Ｖ字谷で収束され、那岐山系（那岐山 1,255m、滝山 1,197m、広戸仙 1,115m など）を越えて吹き降ろすことで発生する、おろし風である。この地域の集落は、北側に「こせ（木背・戸背）」と呼ばれる防風林を植えて、広戸風に備えている家屋が多くみられるなど、景観や人々の生活に大きな影響を与えている。

ストーリー

■広戸風のメカニズム

広戸風は、太平洋岸を北東や東に向かって台風が進むときに、よく発生するといわれている。昭和 28（1953）年に行われた大阪管区気象台の調査の結果、広戸風が吹くメカニズムは、次のように報告されている。

①広戸風が発生するには、大気が成層構造をなし、山頂付近の上層の風速が、地面近くに比べ大きく、その風は北寄りであること。

②山を越えた気流は、風下の地面に吹き降りてから、一度はねあがり、再び地面に向かって吹き降ろす。

③那岐山の風上側に北から入る谷（鳥取県　千代川）があること、風下側が広い平坦地という地形条件がある。

■災害と向き合う

この地域の人々は、広戸風によって田畑の作物を守ることはできないが、せめて住居は守りたいとのことから、防風林である「木背」を設けたり、家の高さを低くおさえ「ツシ天井に土をあげる」等の工夫を行いそれが伝えられてきた。この木背は、この地域ではごく普通に見受けられるものであり、木背の一般的な形は、母屋と納屋の北側に高さ１ｍ～２ｍ築地を設け、その上部または前後に檜・赤松・椿・竹等を植えたものが多い。現在の国道 53 号より北の中国山地に近づくにつれ、木背を備えた家の割合が多くなるという傾向があるとの調査もある。この木

背がある風景は、広戸風が吹くこの地域独特の景観をみせており、木背が地名として残っている場所もある。ただ、近年は、木背を設けない家屋がほとんどである。

先人は、どのような天候や条件で広戸風が発生するのかを例えば、「風枕が滝水のように動いて山の麓に降りてくると、半日くらいで風が吹く」とか「大雨が降ったら風が弱い」等言い伝えや自らの体験の中で予測し、広戸風に向き合ってきた。勝北地区の北部の集落では、風枕が動きだすと、田んぼに行き、稲を南に向けて長い棒で倒しておいて、風による影響を軽減して、稲の脱粒を防ぐ等、広戸風に立ち向かい被害を軽減する知識を蓄えていった。一方で、近世以降人々は広戸風による被害届を出す等して、年貢や租税の引き下げを嘆願する等の行政的な対応も行ってきた。また、対策には費用も掛かることから倹約も行ってきた。「勝北町誌」では「風害のため大倹約」と門柱に大書した表札を掲げた家の存在を確認している（平成３（1991）年当時）。近年建築技術の進歩により、家屋倒壊等の大きな被害は減少し、耕地整理を行った結果、過去に比べ、農産物の被害も少なくなったといわれている。

勝北地区にある神社の資料には、それぞれの村に風神社が祀られていることがわかっているが時代を経るごとに合祀される等して、現在では大吉地内の風の宮、原地内の風神様、新野山形地内の風神社の３社が残る。このうち、風の宮は、ここに大風を吹き出すといわれる風穴があり、これを封じれば広戸風は吹かないであろうと、地域の人は、楢地内の加茂川の川石を運び、風穴を埋めたといわれている（「作陽誌」）。この風穴のある風の宮の森に入り石を投げると、大風が吹くとされていたため、８月中は番人を置いて監視をしていた。また毎年３月３日には、風鎮祭が行われていた。ここには今でも、元禄期に建立された風の宮の石鳥居があり、これには農民たちが風の害を除くため鳥居を寄進したことが刻まれている。

構成文化財

1 木背（こせ）

1－①　木背

1－②　木背のある風景

広戸風の吹く地域では、強風から家屋を守るために「木背」という防風林を家の背後に造っている。この屋敷林「木背」の景観は、この地域独特のものである。

2 風枕

２－①　風枕

広戸風が吹く前になると那岐山・滝山の南斜面に風枕という枕のような雲が東西に発達する。広戸風が吹く前兆であるといわれている。

3 風神をまつる神社

３－①　風神をまつる神社

かつては、それぞれの村に風神社が祀られており、風の神を鎮めるため、村をあげて祭りを行い、風が吹かないよう祈っていた。今は、合祀される等して勝北地区内には３社が残っている。

4 風の宮鳥居

４－①　風の宮鳥居

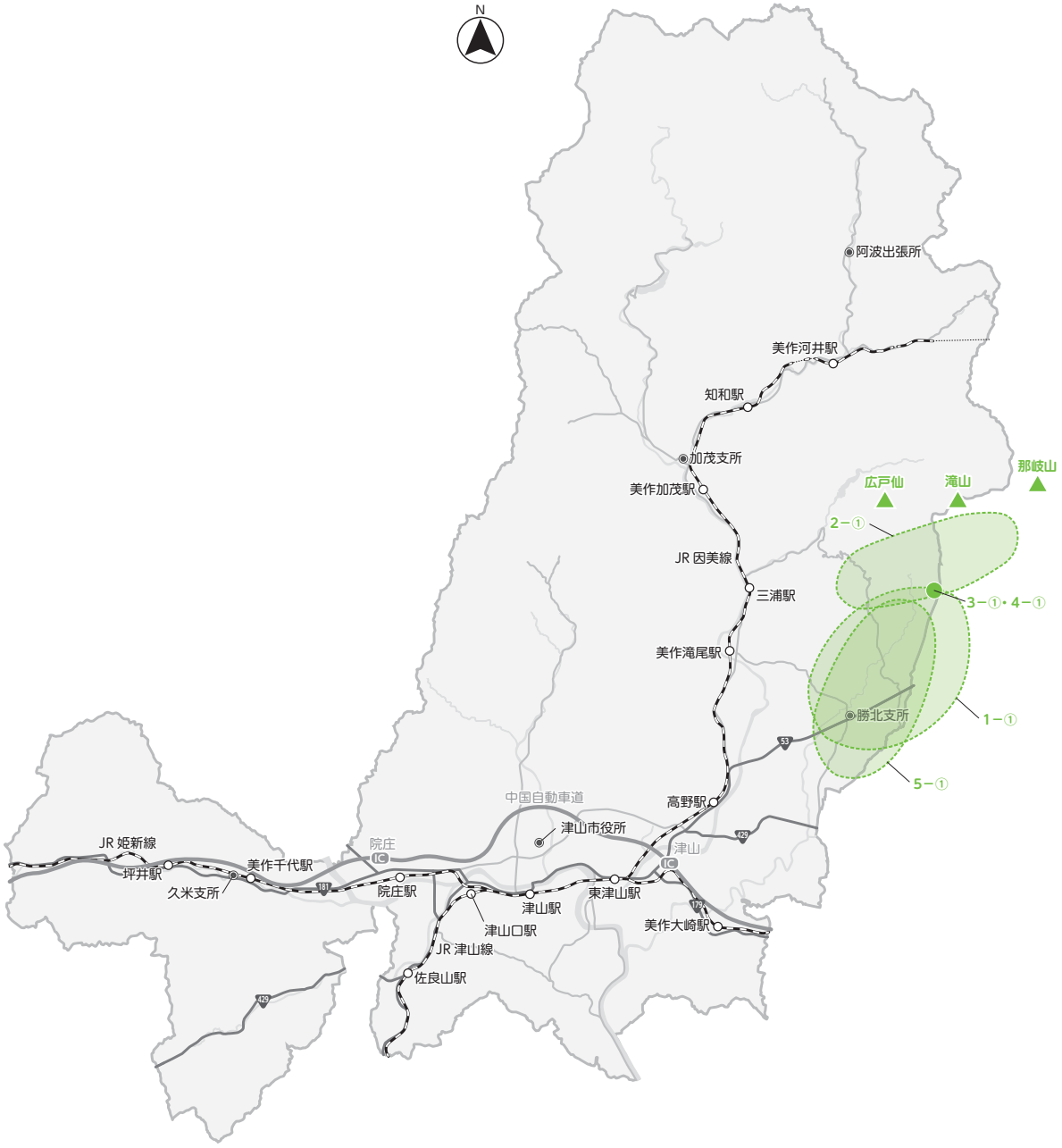
風の宮には、石製鳥居の柱が一本だけ残っており、広戸風の被害を受けるこの地域の人が協力して、風害を防ぐためこれを寄進したことがわかるものである。

5 風の宮のお札

５－①　風の宮のお札

風の宮の風神祭でお札を持ち帰り、村境の道端に立てて、平穏を願っている。

日本三大局地風　広戸風



※番号は構成文化財の写真番号

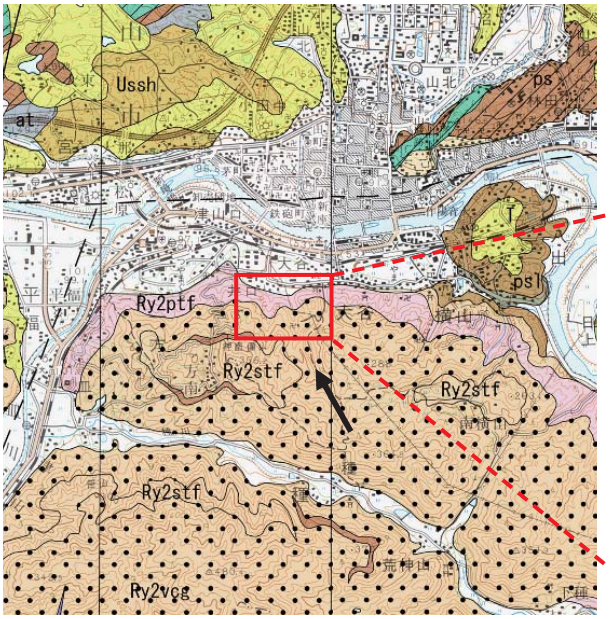
関連文化財群2　城とまちを支えた津山石

概要

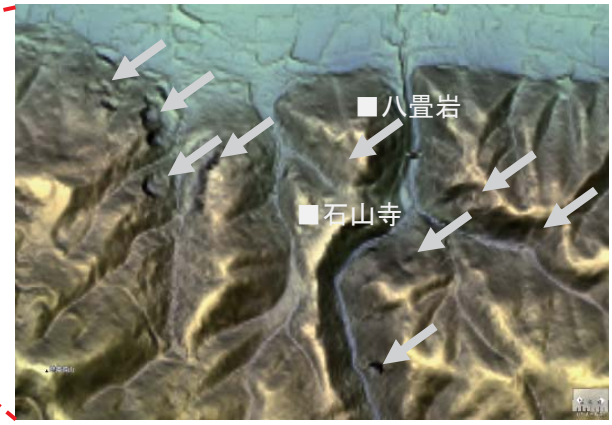
■津山城と津山石

市のシンボル的存在である現在の津山城の原型は、慶長８（1603）年にこの地に赴任してきた森忠政により造られた。現在天守等は失われているが、梯郭式の郭配置は現存しており、郭間や通路を隔てる高石垣は往時の津山城を偲ばせる存在であり、その石垣の美しさが津山城の特徴にもあげられる。津山城は、津山盆地内の丘陵に築造された平山城である。丘陵地の地質は、三郡変成帯に属する泥質片岩や緑色片岩であり、劈開（へきかい）が発達する岩質のため石垣等に用いられることは少ない。このため石垣の築造では、津山盆地の南に連座する神南備山付近の凝灰角礫岩が主に利用された。これは、白亜紀後期（約８千万年前頃）のカルデラを作るような大規模火山活動により産したもので、神南備山付近から南の吉備高原地域では広く分布しているので石材量に困ることはない。また、火山活動の元となったマグマが石英長石質であり、これらは風化耐性に優れるほか、岩石が形成されてから長い時間を経ているため固結度が高く硬いという特徴があるので石垣の材料として適している。この凝灰岩石材が津山石である。

なお、津山石を「津山盆地南縁に位置する神南備山の東方の石山寺を含む大谷から金屋にかけて産出された凝灰岩の石材」とする。



津山盆地と神南備山付近の地質図：津山石採石の痕跡は、矢印付近の石山寺および八畳岩で確認できる。付近の地質記号（Ry2vcg）は流紋岩質凝灰角礫岩
岡山県内地質図 1/5 万（西部技術コンサルタント、2009）の「津山西部」と「津山東部」を使用



津山石採石場跡地付近の地形（カシミール　スーパー地形使用）。石山寺周辺には、八畳岩の他にも採石による地形改変の跡が散見される（矢印）。

■採石場でのエピソード

この津山石に関連して、津山城築城時の採石場でのエピソードがよく知られている。

慶長 13（1608）年 10 月 14 日、城南大谷村石山の採石場で起こった重臣三人の争いは、城普請さなかの森家にとって、思いもかけない大事件であった。時の執権であった各務四郎兵衛元峰（当時 36 歳）は父兵庫元正以来の功績によって禄 8,000 石で家老の最上席、かつ高田城（真庭市）番将の職にあり、その二人の弟藤兵衛・吉左衛門もともに家老に列し、その一門の権勢は並ぶものがなかった。

この頃、城普請のために、採石場には毎日 2 ～ 300 人の人夫が働いており、藩の重臣が交替で現場の指揮に出向いていた。この日の先番の小沢彦八（当時 37 歳）は、もと幕臣であったが、のち辞して忠政に仕え、禄 6,000 石を領して重臣となった。彦八の妻は忠政の妻名古屋氏の妹であった。かねて彦八は四郎兵衛の専権をにくみ、二人の間は決して平らかでなかった。この日彦八が岩に腰を下して杖ではじいた小石が、たまたま上ってきた後番の四郎兵衛に当たったため、四郎兵衛は立腹して無礼をとがめ、彦八も強く言い争ってついになぐり合いになった。この場に居合わせた重臣細野佐兵衛は、驚いて中に入ったが、すでに彦八は抜刀して四郎兵衛の左手を斬り落していた。左兵衛はあわてて四郎兵衛を谷間に突き落した。彦八はすかさず飛び下りて刺そうとし、かえって四郎兵衛に斬られて命を落した。この左兵衛は美濃金山以来の旧臣で 7,000 石を領していた。四郎兵衛の家臣佐藤作太夫は、左兵衛がその主人を谷間に突き落したことを大いに怒り、槍をとって左兵衛を突き殺した。四郎兵衛は急を聞いて駆けつけた弟藤兵衛や家臣らに守られて邸に帰ったが、深く恥じてその夜自刃した。

この変事が伝わると、おのおのの組士たちは、みな武装してそれぞれに参集した。高田城（真庭市）の守備に当っていた四郎兵衛の弟吉左衛門も、軍兵を挙げて急いで帰邸し、小沢・細野の組士もまた戦備を整えて相対した。この三氏の邸はみな城郭内の内山下にあって、付近一帯は大変な騒ぎになった。しかし家老大塚丹後の処置が適切であったため、大事に至らないで終わった。当時江戸に居た忠政は、この報を聞いて大いに怒り、三氏の家を取り潰した。このエピソードからは、石切り場は重臣が担当すべき場所であったことがわかり、築城、あるいは城下町建設にあたり石材の産出が重要視されていたことが知られる。

ちなみに、津山城内では石垣には津山石が使用されているが、城内の暗渠排水、あるいは雨落ちの開渠の排水路については、より加工の容易な「豊島石（てしまいし）」の U 字溝が使用されている。この U 字溝は柔らかいと同時に脆く、非常に破損しやすいのであるが、商品として流通していたらしく、岡山城と津山城で全く同一の規格で作成された U 字溝が出土している。

■城下町の津山石

津山石の利用は津山城の石垣に止まらない。城と城下町を仕切る堀の石垣、武家屋敷の土塀や土蔵の基礎、街路の両側溝の石組み、町家の背後溝など、城下町のありとあらゆるインフラ整備に津山石は使われており、津山城下町の建設と津山石とは密接不可分な関係と言える。

具体的には、城東地区には旧出雲街道の宿場町の建造物群が残されているが、これらの建物の基礎や水路の護岸、小石垣等に津山石は使われている。また、津山城の西、田町の武家屋敷の水路脇の腰石垣や、武家地街路の側溝石垣等にも津山石が現存している。津山城の築城と城下町の整備にあたり、津山石は無くてはならない石材であり、広く利用されていたことは、現在の城下町景観の中にも確実に継承されている。

そして現在では津山石の採石場はなくなっているが、江戸時代に産出され、城下町で使用され、近年の開発によって不要となった津山石が、現在でも住宅の庭石等に再利用されている。

■津山石の採取

津山石は、神南備山の東北東の大谷地区の山で採取された。元の採石場の跡には現在、石山寺が建立されており、その境内で津山石を切り出していた当時の矢穴跡などが確認できる。また、石山寺の縁起を記した文章でも津山城築城の折から石材を切り出していた場所であることが記載されている。石山寺の北東約 200m のところにある“八畳岩”も旧採石場であり、こちらでも矢穴跡や岩盤を切り出した痕跡を認めることができる。さらに地形図を見ると、人工的に斜面を切り出したような痕跡を認めることができるが、採石場跡地であったかについては、今後の調査を待つ必要がある。いずれの採石場も津山盆地から山地へと地形が急変する場所のため、切り出した石材を山から直接盆地に落とすことができる場所であることや、石の消費地である津山城や城下町まで約 1 km しか離れておらず、原石山として好立地を備えた場所であった。現在は津山石としての採石は行われていないが、津山城築城 400 年を記念して平成 16（2004）年に大谷地区に残っていた大石を津山城まで運ぶ「津山歴史時代絵巻～築城大石曳き～」が行われた。津山城やそれにかかわる津山の人々の歴史を後世に伝えていくために、「津山石」を文化財として伝承していくことは重要である。

構成文化財

1 津山城

1 －①　津山城の石垣

白っぽい色調の石（石英長石質の火成岩の特徴）が多い。（城郭（石垣））

1 －②　津山城の石垣の石（近接写真）

白色の基質中に最大数 cm の大きさの火山岩質の岩片や 2 mm 前後の石英粒子（破片）などが混入している。（城郭（石垣））

2 忘れさられた石

2 －①　忘れ去られた石

津山城内に置かれ津山石の原石。大谷地区で発見され、築城 400 年のイベントとして津山城まで運ばれた。（津山石の残石）

3 石山寺

3 －①　石山寺境内の採石場跡

矢穴跡の列が見られる。（採石場跡）

3 －②　石切場跡の標柱

石山寺境内に設置された石切場跡の標柱（採石場跡）

4 八畳岩

４－①　八畳岩から津山城方面

津山盆地の南縁の山地であり採石場の立地として優れる。（採石場跡）

４－②　八畳岩に見られる採石跡

矢穴跡の列が見られる。（採石場跡）

5 城東地区の民家の基礎石垣

５－①　城東地区の民家の基礎石垣

津山市城東伝統的建造物群保存地区内の民家の基礎の石垣（石垣）

6 田町の民家の石垣

６－①　田町の民家の石垣

田町の民家の石垣（石垣）

7 田町の武家屋敷の石垣

７－①　田町の武家屋敷の石垣

田町の武家屋敷の小石垣（石垣）

城とまちを支えた津山石

※番号は構成文化財の写真番号

関連文化財群3　中国山地の製鉄所　鉄の遺構群

概要

鉄は人々の生活に欠かすことのできないものであることは言うまでもない。

市街地北部の加茂地域ではその鉄とかかわりのある地形が各所に残っている。古代から近世にかけて砂鉄が採集された跡である。この地域の人々の生活は製鉄と切り離すことのできない環境の上に成り立っている。

ストーリー

中国山地の広い範囲に分布する古第三系の山陰花崗岩は、副成分鉱物として磁鉄鉱を多く含み、磁鉄鉱系列の花崗岩として記載される（Ishihara,1980）。この磁鉄鉱は風化した花崗岩体を切り崩して選鉱することで容易に濃集させることができるので、山陰側・山陽側を問わず中国山地の一帯で砂鉄採集（鉄穴流し）が行われてきた。

採集された砂鉄は、現地で製鉄を行なうことで粗鋼化されたが、製鉄を行なうためには炭（木炭）が必要であり、これも中国山地の山林から容易に調達できる状況であった。古代から近世にかけての日本の製鉄は炉の中に砂鉄と木炭を投入して高温の状態で鉄を作り出す「タタラ吹製鉄法（通称「タタラ」）」で行われていた。

４世紀末から５世紀にかけての古墳から鉄滓（タタラ製鉄に伴い排出される残滓）が確認されていることから、津山地域における鉄（タタラ）の歴史は古い。津山市内では６世紀後半に遡る、発見時としては日本最古の製鉄遺跡である大蔵池南遺跡が久米地域で発見され、加茂地域に近い草加部地域の緑山遺跡では、製鉄に使用する炭を作ったと推定される「横口付き窯（通称「ヤツメウナギ」）」が密集して発見されるなど、日本最古の製鉄地域の一つであることが考古学的に証明されている。また、５世紀半ば以降の小古墳には鉄滓が伴うものが多数あり、津山地域の集団の長は鉄・鉄器生産に何らかの形でかかわっていたものがいたことも推定される。

また、西吉田北１号墳、長畝山２号墳からは鉄鉗（かなはし）や金槌という鍛冶道具が出土しており、製鉄開始前には、鉄器を加工する集団も存在していたことが判明している。特に、西吉田北１号墳からは朝鮮半島から渡ってきたと思われる鉄鐸（てったく）も出土しており、これら鉄器生産のルーツが朝鮮半島にあることを暗示している。

津山市及びその周辺地域では古代・中世を通してタタラ製鉄は隆興し、江戸時代以降には「山内」と呼ばれる製鉄に関わる職人たちが集住する集落が形成され、タタラ製鉄は最盛期を迎えた。それに伴い、砂鉄の採集のため山を崩すことにより、川が濁るなどの状況が発生し、中流域の

津山藩や下流域の岡山藩から苦情が出るような、鉄生産に伴う負の側面が顕在化したことも知られている。

このような、中国山地の自然を背景とした砂鉄の採集、炭の調達から、製鉄に至る一連の産業文化遺構を鉄（タタラ）の遺構群と呼ぶ。

砂鉄や粗鋼などの中国山地から産物は、一旦津山に集められ、吉井川を通じて高瀬舟で瀬戸内海まで運搬され、備前地方の刀剣製作等下流の鉄製品産業の発展を支えた。津山の発展は間接的ではあるが、鉄（タタラ）によって支えられてきたと言っても過言ではない。

鉄（タタラ）の文化は津山市域においては現在途絶えているが、鉄穴流しのために改変された地形は各所に残存し、その一部には製鉄を行った炉跡や鉱宰も残存する。また、鉄穴流しによってできた緩斜面や、切り崩した土砂が堆積した谷地の平地は農地として現在でも利用されている。さらに、沈砂池とされた場所には湿地が形成され、特異な植生も生じている等、津山の鉄（タタラ）の遺跡群は、産業遺産、文化遺産、自然遺産としての価値が高い。

構成文化財

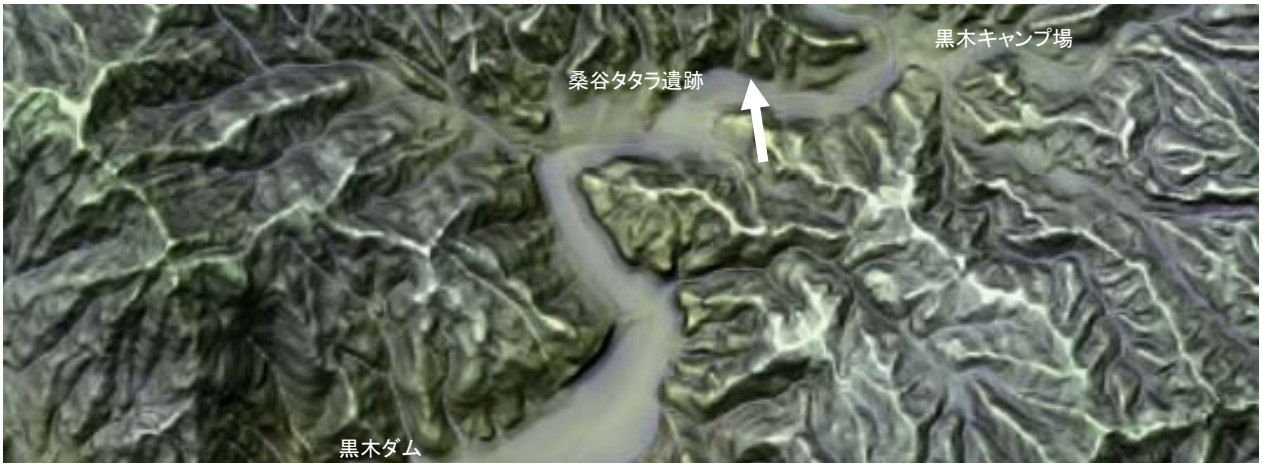
1 桑谷タタラ遺跡

1 −①　桑谷タタラ遺跡の鉄滓

桑谷タタラ遺跡の地表面の鉄滓（加茂町黒木）（鉄穴流し跡、製錬炉跡）

1 −②　桑谷タタラ遺跡付近の林道切端に現れた炉跡

地表面近くの土に焼土が見られ周囲に鉄滓が散乱している。（鉄穴流し跡、製錬炉跡）



１－③　桑谷タタラ遺跡付近の地形モデル：砂鉄の採取により尾根がなくなっている様子が明瞭である。（矢印）（鉄穴流し跡、製錬炉跡）

2 青柳の改変地形群

２－①　白金山

かつて“青柳の崩れ山”と呼ばれていた砂鉄採取地（加茂町青柳）（鉄穴流し跡）

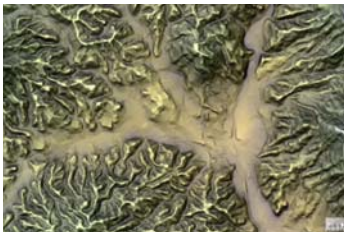
２－②　加茂町青柳地区の緩斜面地形

砂鉄採取によって尾根を切り取ったり、堆砂によって平坦化した地形（鉄穴流し跡）

3 宇野の改変地形群

３－①　鉄穴流し跡の残丘

砂鉄採取に取り残された残丘と改変地の農地（加茂町宇野）（鉄穴流し跡）



３－②　加茂町宇野地区の改変地形

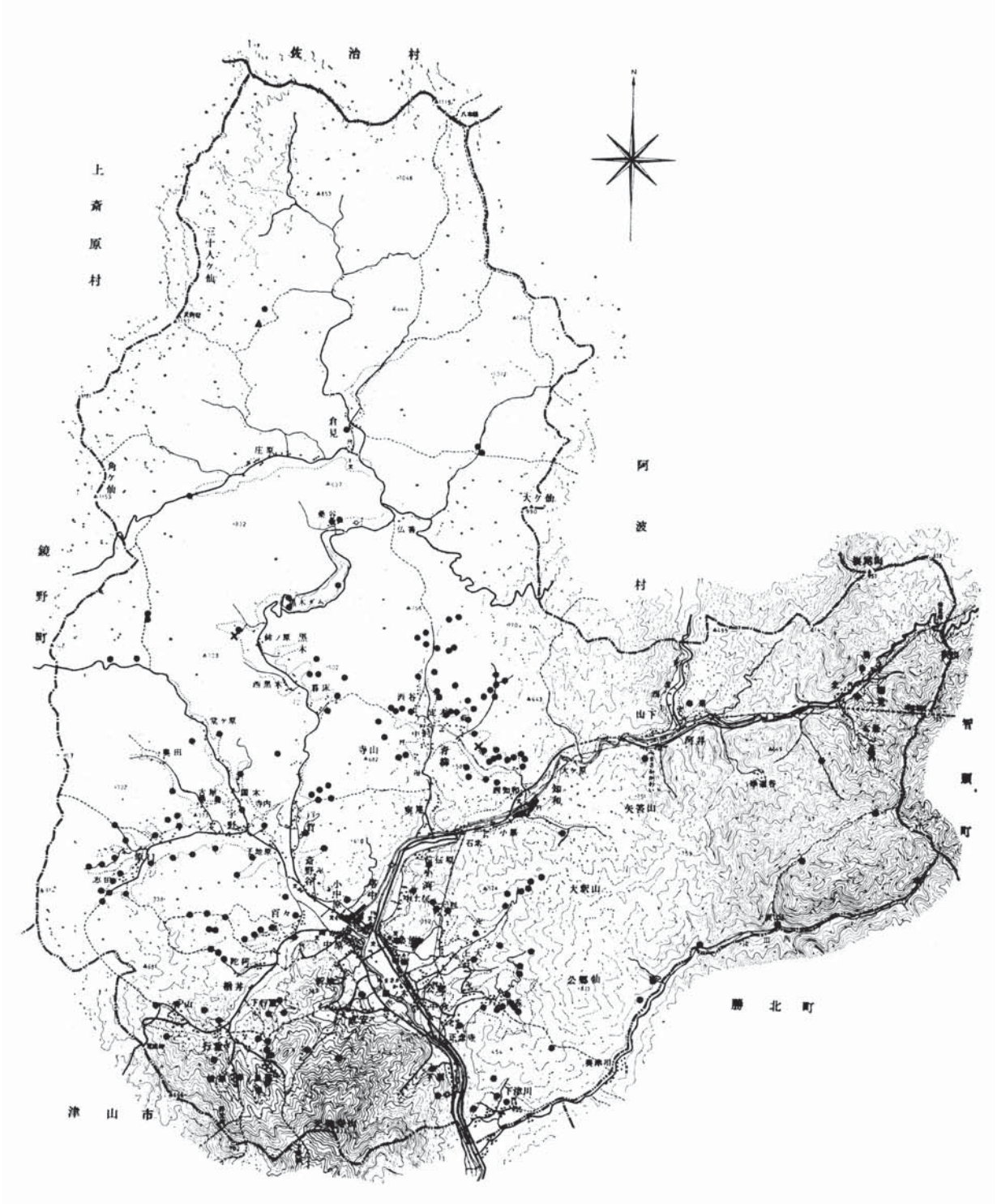
中央部付近に残丘、溝状地形、尾根の切取りが確認できる（鉄穴流し跡）

鉄穴流し跡等の改変地形の他に、炉跡や鍛冶に関する信仰の形跡（金屋子神）等も確認されているが、現時点では未整理のものが多く、調査の進行により順次文化財として追加する必要がある。

以下は鉄滓等が出土した古墳などの遺構

④～は「作州のみち２（上・下）　津山朝日新聞社（平成８年）」より引用。

番号	文化財の名称	類　　型
④	美和山古墳群	鉄滓出土
⑤	押入西１号墳	製錬鍛冶滓
⑥	長畝山２号墳	鉄滓、鉄片、鍛冶道具
⑦	六つ塚１・３・５号墳	鉄滓、鍛錬鍛冶滓
⑧	万燈山古墳	鉄滓、鉄製品
⑨	草加部東蔵坊遺跡	砂鉄製錬滓、鉄滓
⑩	天神原１号墳	砂鉄製錬滓
⑪	鮒込２号墳	砂鉄製錬滓
⑫	狐塚遺跡	砂鉄製錬滓、鉄塊、鍛錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶炉
⑬	二宮遺跡	鍛冶滓、製錬滓、鉄滓
⑭	ビシャゴ谷遺跡	砂鉄製錬滓
⑮	三太夫林古墳群	鉄滓
⑯	河面丸山古墳	鉄滓
⑰	横山明見峪１号墳	鉄滓
⑱	緑山遺跡	砂鉄製錬滓
⑲	押入西遺跡	砂鉄製錬滓、鉄滓
⑳	アモウラ遺跡	鉄滓
㉑	一貫西遺跡	鉄滓、鍛冶炉、砂鉄製錬滓
㉒	天神原遺跡	鉄滓、鍛冶炉
㉓	大田十二社遺跡	鍛冶炉、鉄滓
㉔	二宮大成（大東）遺跡	鉄滓
㉕	紫保井遺跡	鉄滓
㉖	高橋谷遺跡	鉄滓
㉗	大畑１号墳	鉄滓、鉄塊
㉘	クズレ塚古墳	鉄滓
㉙	深田河内遺跡	炉底滓、鉄滓
㉚	別所谷遺跡	鉄滓
㉛	大畑遺跡	鉄滓
㉜	小原遺跡	鉄滓
㉝	キナザコ遺跡	炉跡
㉞	青柳神社	金屋子神
㉟	大蔵池南製鉄遺跡	鍛冶炉、砂鉄製錬滓
㊱	領家遺跡	炉、羽口、鉄滓
㊲	芦ヶ谷古墳	砂鉄製錬滓
㊳	高岩１号墳	砂鉄製錬滓
㊴	コウデン２号墳	製錬滓
㊵	コウデン８号墳	鉄滓
㊶	荒神西古墳	製錬滓
㊷	大沢２号墳	砂鉄製錬滓
㊸	落山古墳	砂鉄製錬滓
㊹	釜田１号墳	砂鉄製錬滓
㊺	糠山４号墳	鍛冶滓
㊻	糠山６号墳	砂鉄製錬滓
㊼	久米廃寺	鉄滓
㊽	宮尾遺跡	鍛冶炉、鉄滓、羽口、木炭片
㊾	加茂町製鉄関連遺跡群（32 か所）	
㊿	黒木地区鉄滓散布遺跡群（113 か所）	
51	阿波のタタラ遺跡群	鉄穴流し跡、金屋子神等

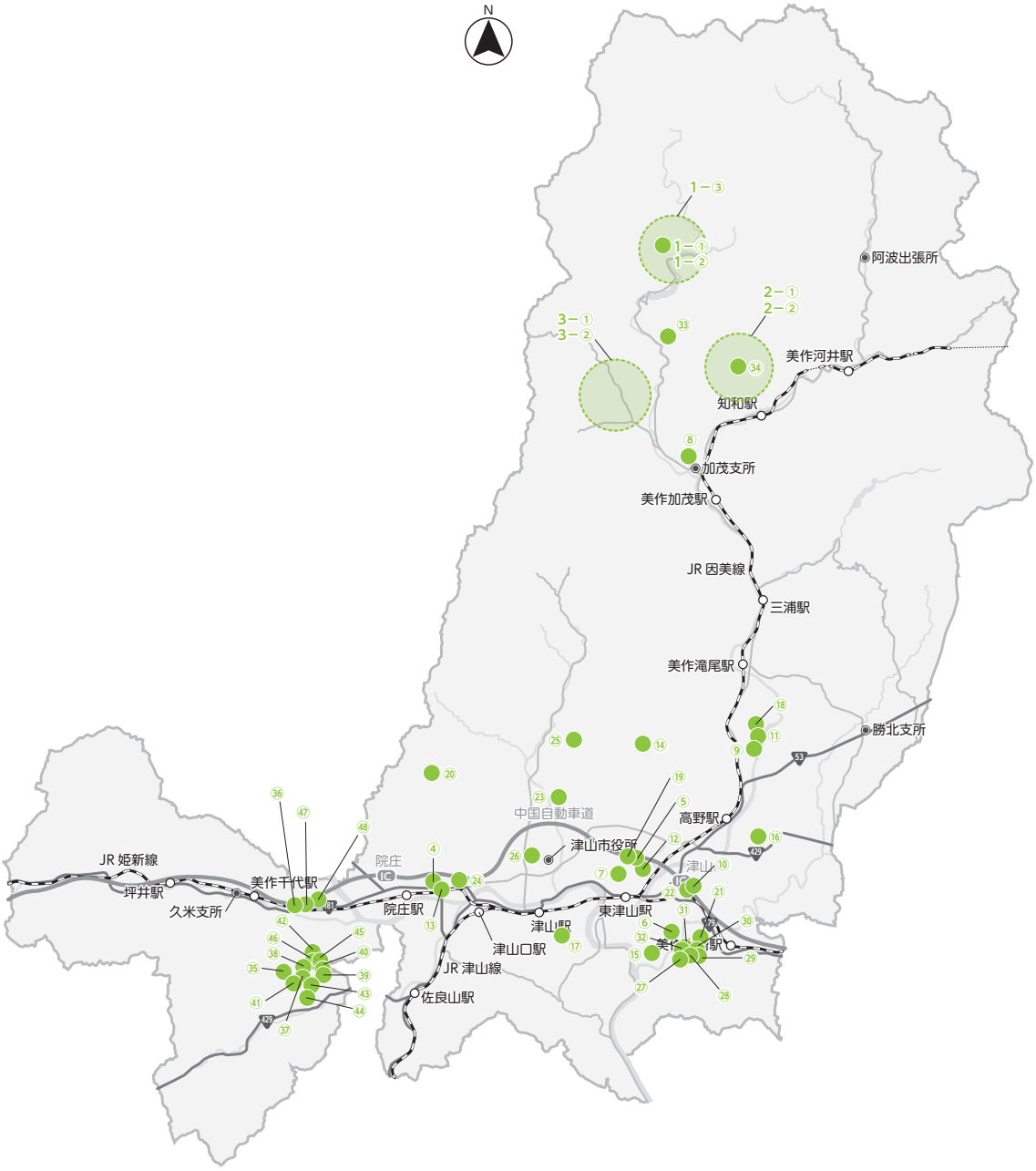


鉄滓分布図（加茂地域）

・鉄滓分布地
×金屋子神社所在地

【出典】加茂の鉄滓分布図（加茂町史：加茂町、昭和 51 年　p351 を一部改変）

中国山地の製鉄所　鉄の遺構群



※番号は構成文化財の写真番号